



ふれあい



写真 島岡 理

【もくじ】

病院の役割	院長	宮田 剛	・・・2
医療相談室のご紹介	主査医療社会事業士	渡邊 純子	・・・3
ハイブリッド手術室 脳神経センターより	脳神経センター長	木村 尚人	・・・4、5
専門・認定看護師会の活動	主任看護師	伊藤 啓一郎	・・・6
褥瘡対策チームの紹介	皮膚・排泄ケア特定認定看護師	十文字 晴美	・・・7
ZOOM による入院面会	看護師長	武智 満	・・・8
編集後記	広報委員長(小児外科長)	島岡 理	・・・8

基本理念

高度急性期医療を推進し、県民に信頼される病院

※広報誌「ふれあい」は1,800部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

病院の役割

院長 宮田 剛

当院広報誌「ふれあい」をお読みいただき、ありがとうございます。院長の宮田剛です。世の中ではウイルス感染症だけでなく、地震や台風などの自然災害、ウクライナ侵攻、隣国の不穏行動など、不安になるニュースばかりですが、こんな時代だからこそ周りの問題に左右されず自分の幸せを守る「軸」をしっかりと持っていたいものです。その幸せの基盤である健康維持に役割を持つのが医療です。

ところで人は年を重ねるうちになにかしらの体調不具合が出てくることは避けられません。いわゆる「正常範囲」から逸脱した個々の不具合に医学的な名前をつけると、例えば、高血圧、糖尿病、腎機能障害、不整脈、心不全、骨粗鬆症などの診断名が付きます。最近では加齢による筋肉減少、筋力低下などにもサルコペニアやフレイルなどの診断名が付く話題に上ることも多くなっていますが、これもひとつの加齢による不具合の認識です。不老不死の薬はいつの世も求められる人類の夢であり、医学的進歩が老化現象の各論的な病態を突き止め、その進行を遅らせる手段、薬剤を個々の病名ごとに開発されてきたため、人類の寿命はどんどん延びてきています。しかし残念ながらそれは永遠ではなく、遺伝子プログラムとして120歳くらいが上限とされています。我々の任務はこの120年プログラムをいかに全うし、いかに早期の脱落を防ぐかという発想でお手伝いをする。病院の役割は「病気を治すことです」と胸を張って言えない時代になり、「うまく病気と付き合っていきましょう」という言葉も増えています。がんも同様です。

患者さんが不愉快に思われる医者セリフに「年のせい」があり、これは見放された印象を受けるとともに、医者責任放棄と感じると言われますが、上記の背景から言うとほとんどの病気は「年のせい」かもしれません。「人は皆、老いる。そして何かしらの身体的不具合を持ちながらゴールに向かう。」という真実は、残念ですが医療を受ける側も提供する側も納得しておかなければならない大前提だと思います。

そんな生物学的現実の中で、当院はなにを目的に機能していけば良いのでしょうか。医療・保険サービスには、急性期医療と慢性期医療、介護福祉がありますが、急性期医療を担う当院は、急性疾患やがん等の患者さんの苦痛を取り除く治療に全力をあげるのが役割です。急性期医療が一段落したところで、リハビリテーション等のために慢性期病院に転院して治療を継続する医療提供連携システムも、最近では大分受け入れられるようになってきました。患者さんのご理解を頂きながら、社会システムは徐々に変わっていきませんが、さらに地域医療構想、働き方改革、各種デジタルトランスフォーメーションなど、現在進行形で医療提供体制が変わってきています。これからも幸せの軸を守る急性期医療の役割をしっかりと果たしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。





「医療相談室のご紹介」

地域医療福祉連携室（医療相談室） 主査医療社会事業士 渡邊 純子

平穏な日常、人びとの生活は、【経済的安定】・【人間関係のネットワーク】・【住まいの安定】という3つの土台に支えられています。3つの土台が不安定な状態に、病気やケガといった大きな衝撃が加わるとより一層、不安定な方向に傾いてしまう可能性が高いといえます。誰も病気やケガ・事故に合うことを想定して人生設計を立てている人は少なく、予想外の状況に陥った時、不安ばかりが先走り、不安の原因 / 課題を追求出来なかつたりします。『医療相談室』は病気やケガ、事故等をきっかけに生じた様々な生活課題についての相談窓口です。医療ソーシャルワーカー（MSW）が通院、入院を問わず療養中の困りごと…「医療費や生活費、保険等お金にまつわる心配ごと」、「治療・療養のための環境づくり」、「治療と仕事の両立支援」等、多岐にわたる相談に対応しています。

MSW は、相談者（患者、家族等）との「面接」通して、相談者の気持ちの整理を助け、生活課題を明確化、課題解決の方法と一緒に探し、何から着手したらよいかを話し合い、相談者が“自ら解決できるように”支援します。最近は、入院前から退院に向けた支援が開始されるようになり、進歩する治療や病状経過に合わせながらスピード感を持って、相談者へ情報提供するだけでなく、必要状況に応じて主治医看護師を中心とした院内多職種、地域の関係機関 / スタッフと連携・調整する機会が多くなりました。【生活の中にある医療】を意識、福祉のこころで対応します。「こんな悩み、相談なんて…。」「聞いてもいいのかしら？」と思うことでも、遠慮なくお声がけください。

* 当院の医療相談室は、『がん相談支援センター』・『ハローワーク盛岡との連携による就職支援事業窓口』・『脳卒中相談窓口』を兼ねております

* MSW は守秘義務が課せられた社会福祉の専門職です

病気やケガに限らず、人びとが生活を送る中で直面する困難、生きづらさの多様性・複雑性、社会的孤立、虐待、生活困窮、ダブルケア、ヤングケアラー、新型コロナ禍。社会のあり方が変わり、それに伴って人びとの生活も変化する（DX、働き方、SNS・人間関係）なかで新たに生じてくる課題・支援ニーズは、これまでの制度施策では対応では出来ないことも見受けられるようになって来ました。専門職として変化や風向き、見通し / 可能性、相談者のストレングスに気付き、支援を展開出来るよう MSW 自身の知識・スキルをアップデートしなければ、と考えさせられる毎日です。県立病院に医療社会事業士配置から 60 年余り。当院には 6 名の MSW（職名：医療社会事業士）が在籍しております。県民の皆さまが、安心して住み慣れた地域で暮らすことが出来るよう、地域包括ケアシステムの推進に貢献することを目指し、研鑽したいと存じます。ご指導どうぞよろしくお願い致します。



ハイブリッド手術室 脳神経センターより

脳神経センター長 木村 尚人

ハイブリッド手術室が運用開始となり 1年半が経過しました。脳神経センターでは脳動脈瘤をはじめとする全身麻酔でのカテーテル治療をハイブリッド手術で行えることができる体制となりました。昨年度は麻酔科、手術室のスタッフと連携し年間 150 件を越える動脈瘤の血管内治療を行いました。脳動脈瘤の血管内治療は多様化しており、動脈瘤内にプラチナのコイルを入れる脳血管内

<神経内科レジデント>

ハイブリッド手術室が稼働してからは全身麻酔でより安全に手技に集中しカテーテル治療を行えるようになりました。

<神経内科レジデント>

全身麻酔と最新装置のシステムにより、造影剤使用量や被爆量が軽減されました。また、複数の撮像を組み合わせることにより正確な術中診断が可能となりました。覚醒下の手術よりも患者さんの自身の負担も軽減されていると思います。また直達手術と、血管内治療を組み合わせたような手術も可能となりました。

<神経内科レジデント>

動静脈奇形に対する塞栓術後にそのまま内視鏡的血腫除去術を行なった症例やカットダウン下総頸動脈直接穿刺での血栓回収症例等を経験し、全身麻酔下で血管内治療と外科的手術を行えることは患者の侵襲度や負担を減らすことができ、素晴らしい環境と感じました。

<脳神経外科レジデント>

十分な広さと最新鋭の設備を兼ね揃え、なおかつ全身麻酔管理の下で血管内治療が行える施設はそう多くありません。岩手県を代表する病院として恥じない環境だと思います。

<外部研修先生>

血管内治療後シース抜去で止血処置が難しいときにそのまますぐに血管縫合術を行えた。患者にベッド移動などを強いずに次の治療に移行できてハイブリッド手術室こそその恩恵があった。

<脳神経外科 / 血管内治療専門医>

最新鋭の高精細な血管撮影装置を麻酔環境も行き届いた広い手術室内で使用できるのは極めて贅沢な環境だと実感しています。

治療のみならず、整流効果のあるステントを留置すると動脈瘤が消えるフローダイバータ - ステント、整流効果のある袋状の網を瘤内に入れる WEB (Woven EndoBridge デバイス) など多種多様な治療が可能となってきております。

今回は実際に利用している当院の医師の生の声をお伝えしたいと思います。



<脳神経外科 / 血管内治療専門医>

ハイブリッド手術室で出血発症の脳静脈奇形に対する血管内治療と脳室ドレナージを行ったが、手術台を移動せず行える事に加え、ドレナージ留置後の確認 CT もその場で撮影でき、有用であると感じた。

<脳神経外科 / 血管内治療専門医>

脳神経センターとして脳神経内科と一緒に血管内治療を行なっていることが手術室スタッフに浸透したことは大きいのではないかと考えています。

<神経内科 / 脳血管内治療指導医・専門医>

血管撮影室よりも広い空間であり過ごしやすい。動脈瘤治療が全身麻酔で行えるようになったことで治療が安全に施行可能となった。当初は手術室の看護師はカテーテル治療について不慣れな点もあったが、最近は慣れてきて放射線部と遜色ないと思われる。

<神経内科 / 脳血管内治療指導医・専門医>

手術室が広いので、手術台や血管造影装置等の大型医療機器があっても、麻酔の際にスタッフ・患者の行動・移動に制限が少なく、他科と共同で治療を行いやすく、より安全に治療を行えるようになった。

最新の機器の性能を用いて良い解像度の画像が得られることや造影剤の量や被曝量を低減など患者さんへの負担の軽減に役立つことはもちろんのこと、循環呼吸管理のプロフェッショナルの麻酔科の元で全身麻酔の治療を行えることができ、万が一のトラブルが起きたときにも手術やエコー検査とカテーテル治療の併用ができることで解決できるという一面もみられ安全な治療に貢献できているのではと感じました。

また普段の治療が安定し、きれいな画像、広い環境で手術が出来るため、岩手県内はもとより、青森、山形、秋田の脳血管内治療の勉強をしている東北の他県の先生に加え大阪や東京など全国各地から当院の手技の勉強に来ており、岩手県の医療のレベルの高さのアピールにも一役買っております。

褥瘡対策チームの紹介

皮膚・排泄ケア特定認定看護師 十文字晴美

褥瘡対策は今や入院基本料の施設基準に包括されており、医療施設にとって褥瘡予防管理は重要な取り組み事項となっています。また、令和4年度の診療報酬改定では、褥瘡対策基準の見直しが行われ、これまで以上に多職種連携が重要視されるようになりました。

当院でも、長年、「多職種連携」をキーワードに活動を続けています。今回はその活動についてご紹介します。

まずは、褥瘡カンファレンス・回診についてです。毎週水曜日に院内の褥瘡患者さんのカンファレンス・回診を行っています。カンファレンスには非常に多くの職種が携わっており、その点が当院の特徴だと感じています。具体的には、皮膚科医師、形成外科医師に加え、NSTとの連携をより高めるため、NST活動に携わっている糖尿病・内分泌内科医師、歯科口腔外科医師も参加しています。その他、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師、看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師が参加し、トータルケアの視点でケアが提供できるよう、カンファレンスを行っています。それぞれの専門性を理解しながら、より患者さんの生活の視点に立ったケアの実践を目指しています。

多職種での取り組みは、褥瘡カンファレンス・回診だけではありません。NSTと協働し、院内全職員の基本的知識の向上を目的に定期的な研修会を毎年開催しています。今年度は5つのテーマでの開催を予定しています。研修会の講師は各職種が担当し、昨年度からeラーニングの形式で実施しています。その他、定期的に褥瘡ニュースレターの発行も行っており、トピックスや注目したい話題など、幅広い内容で情報発信を続けています。

さらに、褥瘡対策に関連した取り組みとして、例年院内全体の取り組みとして行っているのが「床ずれ予防の日」の啓蒙活動です。日本褥瘡学会が提唱している10月20日の「床ずれ予防の日」を中心とした期間に、「床ずれ川柳」を院内で募集し、昨年度も同学会が応募している床ずれ川柳に応募しました。喜ばしいことに、当院の応募先品が床ずれ川柳10選に選ばれました。地域全体で褥瘡予防に関心を持ち、適切な予防やケアの実践につながるよう、今後も取り組みを続けていきたいと思えます。

最後に、当院は高度急性期病院であり、褥瘡患者さんの多くが地域病院への転院、施設へ退院する機会が多いと感じています。できるだけ早期に壊死組織の除去がすみ治癒過程を辿りやすい局所環境を整えること、また、治療と生活の両面から患者さんを捉え、ケアの実践・情報提供を行うことが大事な役割だと認識しています。これからもチームで力をあわせ、よりよいケアが提供できるように頑張っていきたいと思えますので、皆様よろしくお願い致します。



カンファレンスの様子

処置の様子



ZOOM による入院面会

地域連携室 看護師長 武智 満

新型コロナウイルスの影響により、入院患者さんの面会が禁止となる中、ご入院されている患者さんにご家族が少しでもお話いただけるよう、また、遠方のご家族とつながる事ができるよう、2021年4月からZOOMを利用したオンライン面会を開始いたしました。R3年度117件、R4年度は9月までに81件のご利用をいただいております。

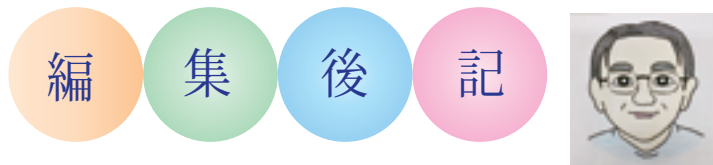
ZOOM面会の予約は、面会受付の看護補助者3名で担当しています。当院ホームページから、メールで予約をいただき（毎週木・金曜日の14時～16時（面会時間10分/回）、各病棟へ確認後、相手先さまへミーティングID・パスコードを送信します。

ZOOM面会は、徐々に利用件数が増えており、リピーターの方々が多く利用されている現状です。ZOOM面会時iPadの不具合が起こることも多々あり、その都度、総務課や業務企画室の「機械に強い」職員の心強いサポートを得て対応しています。

ZOOM面会に対応していただいている病棟スタッフには、患者ご家族から「忙しい中対応していただき、ありがたい」などの言葉をいただいております。ZOOM面会は高齢者には難しい部分も多いため、できるだけ早く面会禁止が解除され、院内で対面面会ができることを切に願っております。



面会受付担当の3名と総務課長
ZOOM面会の様子



白鳥が鳴きながら夕空を飛んでゆく姿を見かけるようになるにつれ、いよいよ冬が近づいてきたんだという感じがします。寒くなりましたね。

さて話しは変わりますが、中央病院ではこの1年間で2件の脳死下臓器提供が行われました。経験してみても改めて思ったのですが、病院内のほぼすべての部署が協力してそれぞれの役割を果たして初めて実現できた事であったと感慨深いものがありました。臓器提供を承諾して下さった患者さんご家族の思いはもちろんのこと、それを実現しようと苦労して下さった主治医団、また体制作りを行ってきた院内移植コーディネーターとそれをバックアップして下さった県の移植コーディネーター、診療部、看護部、検査部、手術部、事務局など、通常とは異なった業務に協力していただきました。脳死法案が施行されてから現在までの間に全国で850例を超す脳死下臓器提供が行われてきました。移植医療は臓器提供者の善意による臓器の提供無くしては成り立たないため、それに違和感を覚える医療関係者もおられるとは思いますが、移植医療無くしては助けられない命もある事を念頭に、今後も機会があれば提供者、ご家族のご意思を尊重させていただければと思っております。

その後県コーディネーターから、脳死下臓器提供を承諾して下さったご家族が、臓器提供を受けた患者さんの元気になった様子や感謝のお手紙を知らされて心から喜んでくださっているという事実を伝えられると、これに携わる事ができて良かったなと思う今日この頃です。来年は卯年、よろしくお願い申し上げます。

お知らせ

当院の新型コロナウイルス感染症対策として、来院時にマスクの着用、手指消毒をお願いしております。

ご不便をおかけいたしますがご協力のほどよろしくお願い致します。



岩手県立中央病院
〒020-0066 岩手県盛岡市上田 1-4-1
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.297 令和4年11月
岩手県立中央病院 広報委員会
◆委員長 島岡 理
相馬 淳 及川 由美子
渡辺 道雄 高橋 慎太郎
高橋 大輔 高田 淳子
千葉 依吹 小守 理子
高橋 佳世子 小島 菜奈
藤澤 麻衣子 高橋 翔子
細川 周平 多田 純子
吉田 奈穂子

ふれあいはホームページでもご覧頂けます。

[岩手県立中央病院](#) [検索](#)